

知的障害児教育における合奏指導に関する研究 —教師の支援に着目して—

五十嵐 梨里

I 問題

浅利（1986）は、発達にゆがみが生じやすい障害児にとって、音楽が発達に与える影響は大きいと述べている。また、音楽を媒体とした活動は、自己の情動をコントロールする力を高め、コミュニケーション能力を養うとともに、子どもの社会性の発達を促すといわれている（畦内・小川，2001）。

さまざまな音楽活動の中でも、合奏などの楽器を使った集団活動は、他者を意識すると共に自己の役割をも意識し、自我の形成に大きな効果を与えるといえる（畦内・小川，2001）。齋藤（1992）は合奏について、楽器を使うことにより自分だけの力よりも大きな表現を可能とすると述べている。

しかし、知的障害に起因する発達の障害は、音楽的な面でもさまざまな困難をもたらしている。こうした障害のある子どもにとって、リズムやメロディーを的確に把握したり、曲の情感をとらえたりすることは極めて難しいといえる。また、表現においても、声の質・声域など歌うことの困難さはもちろん、手指の不器用さ・柔軟性のなさなど、リズム奏にも具体的な問題点がある（吉田，1984）。

知的障害児教育における合奏をはじめとした音楽の実践報告は、まだ数が少ないのが現状である。そこで、知的障害児教育において実践されている音楽の授業がどのように行われているのかを調べ、合奏における教師の支援がどうあったらよいのかを分析・検討することにした。

II 目的

本研究では、知的障害児教育における音楽の合奏活動において、児童個々の合奏活動への参加と

教師の支援との関連を分析し、合奏指導を進める上で効果的な支援の在り方について検討することを目的とした。

III 方法

1 対象

A 小学校特別支援学級における音楽の授業での合奏活動を対象とした。授業は、15名の児童（以下、A児～O児とする）とB教諭を主指導者（以下、MTとする）とした教諭3名、介助員7名により行われた。

2 実施期間と場所

1) 第1期（5月～7月）

授業に関する情報収集と児童の実態把握を行った。

2) 第2期（10月～11月）

11月中旬の発表会へ向けたトーンチャイムによる「まっかな秋」（薩摩忠作詞、小林秀雄作曲）と、打楽器による「ラ・バンバ」（メキシコ民謡）の合奏の練習過程及び本番の様子を観察し、ビデオ記録した。

3) 実施場所

授業と発表会はどちらもA小学校音楽室において実施された。

3 分析方法

1) 分析1

第2期における授業のビデオ記録を3名で視聴し、教師の支援を抽出した。

2) 分析2

「まっかな秋」と「ラ・バンバ」を対象とした。それぞれの楽曲のビデオ記録を視聴し、児童の演奏の状況を以下のレベルで評価した。

○：正しく演奏した

△：遅れて演奏した

×：間違っ演奏した

MG：指導者の身体的支援により演奏した。

3) 分析2の結果の処理

児童個々について演奏機会ごとに○△×MGを記録し、演奏実行数/演奏機会数×100(%)の式で○と△とMGの出現した割合(%)を算出した。そして、○の出現した割合を実行率とし、○の実行率を中心に検討した。

IV 結果

1 教師の支援について

合奏活動における効果的な教師の支援のポイントを抽出することができた。

- ・合図の出し方(手さし、指さし)
- ・練習方法(部分練習、反復練習)
- ・教材教具(簡易譜)
- ・児童の配置(和音ごとの配置)

2 児童の実行率について

1) 「まっかな秋」

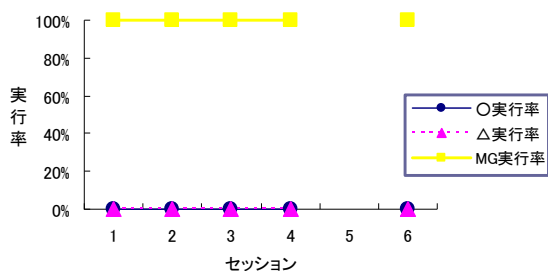


図1 B児:「まっかな秋」の実行率

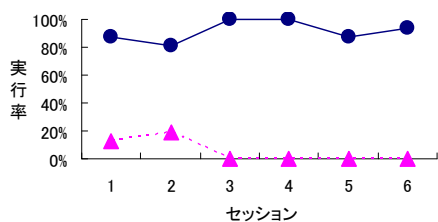


図2 A児:「まっかな秋」の実行率

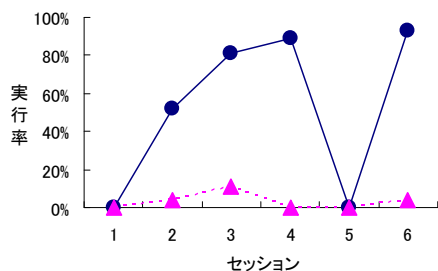


図3 E児:「まっかな秋」の実行率

B児(図1)、C児、K児の3名はほぼMGでの演奏であった。A児(図2)、D児、F児、J児、L児、M児、N児の7名は初めから80%、もしくはそれ以上の高い実行率を示した。E児(図3)、G児、I児、H児、O児の5名は40%程度からセッションを重ねるごとに上昇し、80%程度の値を示した。

2) 「ラ・バンバ」

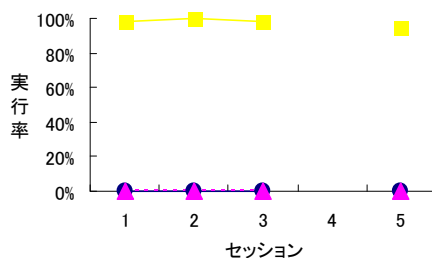


図4 B児:「ラ・バンバ」の実行率

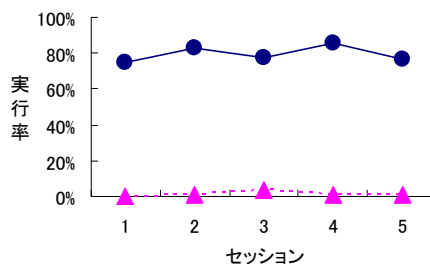


図5 A児:「ラ・バンバ」の実行率

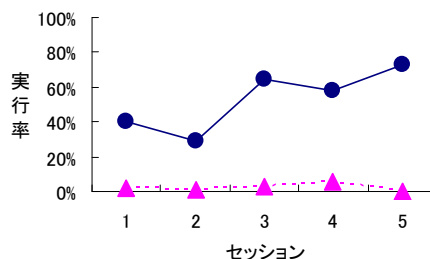


図6 G児:「ラ・バンバ」の実行率

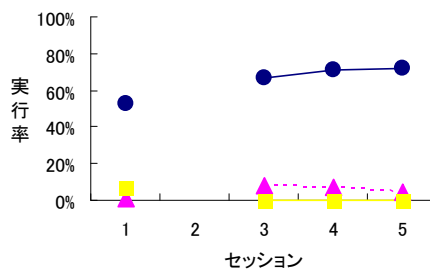


図7 O児:「ラ・バンバ」の実行率

B児(図4)、C児、K児の3名はほぼMGでの演奏であった。A児(図5)、F児、I児、L児、M児の6名は最初から最終セッションまで80%の高い値で安定した。D児、E児、G児(図6)、H児の4名は上昇傾向で80~100%の値であった。O児(図7)は全セッションを通して60~80%の値で安定した。

また、この曲は大きくAパターンとBパターンというリズムパターンによって成り立っており、それぞれ更に細かく3パターンに分けることができた。その中でも、A1パターンとA2、A3パターンとの間に実行率の差が見られた児童が多かった。

V 考察

児童の演奏実行に影響した大きな要因として、MTの合図の出し方が効果的にはたらいたのではないかと考えられる。MTはどちらの曲においても、打点を明確に示す合図を、手さしや指さしで出していた。さらに初期の段階では、手だけの合図ではなく身体全体も大きく使い、たたく場所や休む場所を示していた。児童にとってこの主指導者の合図は、合奏に参加する上で重要な手掛かりとなっていたと考えられる。また、「まっかな秋」においては、和音ごとに児童を配置したことによって、より合図が出しやすくなったものと考えられる。

また、「ラ・バンバ」における実行率がセッションを重ねるごとに上昇した児童の要因を考えると、部分練習による効果が大きかったのではないかと推察される。練習過程においては、部分練習をした後に全体で合わせるという段階を踏んでいた。部分練習は何度も反復が可能であり、正しく鳴らすことができた、たたくことができた、という成功体験を児童自身が確認することができるものと考えられる。

教材教具は、2曲ともに簡易譜が使用された。これらの教材を視覚的な手掛かりとして演奏していた児童もおり、この簡易譜は有効であったと考えられる。

また、「ラ・バンバ」においては、リズムパターンによって児童の実行率に差がみられた。これは、リズムの難易度の違いによるものと考えられる。MTの意図により今回のリズムパターンは作成されたが、さらに児童の実態に見合ったリズムパターンを用いることにより、児童のリズムの演奏はより正確になると考えられる。

VI まとめ

本研究では、合奏における教師の支援として、合図の出し方や教材教具の工夫、適切な練習方法の選択などが、児童の合奏活動を高めていく上で重要であるという示唆を得ることができた。

今後は、MGでの演奏であった児童が、少しでも自発による演奏をすることができるような具体的な支援の検討と、今回見出すことのできた支援がどのような児童にとっても有効であるのか、ということについてのさらなる検証が必要である。

文献

- 浅利享子(1986) 障害児と音楽—鷹栖養護学校音楽クラブの活動—。情緒障害教育研究紀要(北海道教育大学)、5、81-84。
- 畦内真希・小川容子(2001) 知的障害児との音楽を媒体とした相互作用。日本教育心理学会総会発表論文集(日本教育心理学会)、(43)、195。
- 齋藤一雄(1992) 精神薄弱養護学校における合奏指導の計画と意義—高等部合同合奏「ちちんブイブイ」(シヨスタコーヴィチ/交響曲第7番「レニングラード」第1楽章より)の実践—。特殊教育学研究、30(3)、21-26。
- 白石昌子(2002) 集団性と音楽の関係性についての試論(1)—集団的活動としての合奏を手がかりとして—。日本保育学会大会発表論文妙録、(55)、252-253。
- 山本久美子(2002) 障害児の音楽表現を育てるには。日本学校音楽教育実践学会(編) 障害児の音楽表現を育てる。音楽之友社。Pp. 158-166。
- 吉田豊(1984) 器楽合奏の取り組み—精神薄弱養護学校高等部での実践—音楽之友社(編) 障害児の成長と音楽。音楽之友社。Pp. 407-417。